

在宅看護学におけるポートフォリオ評価

吾郷ゆかり・吾郷美奈恵・山下 一也
加藤 真紀・祝原あゆみ

概 要

在宅看護学においてポートフォリオ学習を行い、凝縮ポートフォリオ評価の有用性を検討した。複数の教員による凝縮ポートフォリオの評価点には相関があり、凝縮ポートフォリオは客観的な評価になりうることを確認した。また、凝縮ポートフォリオの評価点と元ポートフォリオの評価点、筆記試験結果および実習評価点との関連をみると、筆記試験結果よりも実習評価点との相関が大きいことが明らかとなった。凝縮ポートフォリオの作成目的の1つは、学習プロセスの再構築であり、臨地実習における多面的な成果と同様に学生の主体的な取り組みなどの学習過程の要素が関連している。看護に関連するな内容を学ぶ在宅看護学において、ポートフォリオ評価を実施することは有用と考える。

キーワード：在宅看護学，凝縮ポートフォリオ，ポートフォリオ評価

I. はじめに

「ポートフォリオ評価」は日本においては1990年代に初等教育において導入され、特に総合学習などの評価法として優れているため、活用を推奨されてきた。2000年以降、医師や看護師の臨床研修や学生の臨地実習において主体的な学習の推進力になること等で有効である（津田，2006；灘，2006）と報告されている。本校では、5年前よりいくつかの科目においてポートフォリオ学習を取り入れた。学生が自己の目標を掲げ、成長するための学習方法として、講義・演習・実習などに活用してきた。

在宅看護学は、疾病や障害を持ちながら地域で生活する人々を支援するために、保健・医療・福祉の内容を統合する力が求められる科目である。学生の看護の応用力と共に主体的学習力を高める必要がある。日本の教育改革の流れの中で、学生自らが主体的に学び考える教育が重要視されている。学生自らが主体的に課題を設定し、それを解決するための学習活動を展開する教育の必要性（鈴木，2000）が強調されている。教育評価の方法もこれまでの筆記試験を中

心とする知識想起型の評価のみでなく、応用力や自己学習力など質的な評価が求められ、新しい教育的学力・評価観に対応したポートフォリオ評価法が注目されている（小田，1999；鈴木，2002）。しかし、その一方で「ポートフォリオ評価の教員による点数化」について否定的な考えもある。「ポートフォリオは本来学生自身による学生のための学習履歴であり、教員による教育評価に用いること自体が不適切である。」といった評価のあり方そのものの見解の違いがあり、誰のためにどのように評価するのかという基本的な概念を再考し、「凝縮ポートフォリオ評価の意義と有用性」を確認していく必要がある。ポートフォリオ学習の有用性について述べられた研究はあるが、ポートフォリオ評価についてその客観性を調査した研究は少ない。

本稿では、在宅看護学においてポートフォリオ学習を行い、凝縮ポートフォリオを複数の教員が評価する方法とその結果報告を行う。また、凝縮ポートフォリオの評価と他の評価方法による評価結果と比較することからポートフォリオ評価の有用性について検討した。

<用語の定義>

ポートフォリオに関する用語の定義は、鈴木

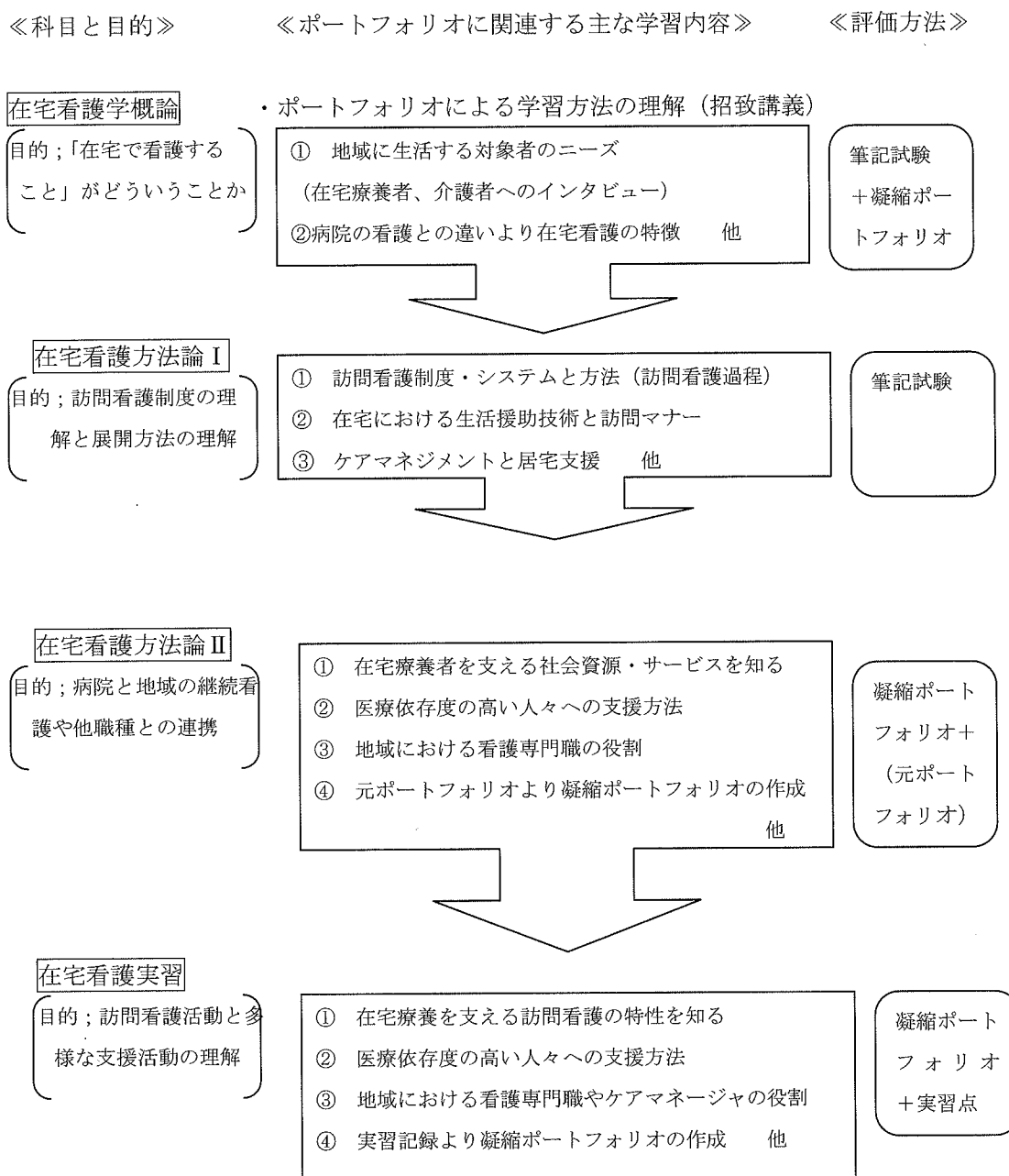


図1 在宅看護学におけるポートフォリオ学習のプロセス（平成18, 19年度）

氏の『ポートフォリオで評価革命』に用いられる用語（鈴木, 2002）を参考にした。

- ・ポートフォリオ；これまでの歴を未来に活かす意図で、自分のしたことを自分の意志により“情報”をファイルに一元化したもの。
- ・元ポートフォリオ；授業や実習に関する情報を経時的に意図的にファイルしたもの。
- ・凝縮ポートフォリオ；元ポートフォリオに入れた学習履歴を集約し、テーマに沿って再構築したもの。
- ・凝縮ポートフォリオ評価；学生が自らの学習

テーマにそってA-3用紙に再構築した学びの成果物を、5つの評価の視点により評価すること。

Ⅱ. 目 的

凝縮ポートフォリオを複数の教員が評価した結果は、在宅看護学の学習の成果を判断する客観的指標として有用であることを検証する。

表1 凝縮ポートフォリオ評価基準

評価基準	配点
① 言いたいことが明瞭か	1～10点
② そこに根拠があるか	1～10点
③ ロジカル性はあるか	1～10点
④ 分かりやすいか	1～10点
⑤ 誰かの役にたつ内容か	1～10点

表2 4評価者の凝縮ポートフォリオ評価点

	A評価者	B評価者	C評価者	D評価者
度数	72	72	72	72
平均値	35	35	33.19	24.58
中央値	40	40	30	25
最小値	10	10	10	10
最大値	50	50	50	40
標準偏差	10.88	11.87	10.72	7.86
範囲	40	40	40	30

Ⅲ. 研究方法

1. 在宅看護学の学習プロセス概要と評価方法

在宅看護学において学生は、2年次前期に在宅看護学概論、後期に在宅看護方法論Ⅰ・Ⅱ、3年次の在宅看護実習の4つの科目を必修科目として学習する。

図1のように、科目の目的により学習プロセスおよび評価方法を組み合わせて実施した。4科目のうち、学生が凝縮ポートフォリオを作成するのは在宅看護方法論Ⅱと在宅看護実習である。

2. 対象

看護学科3年次の学生に本研究の趣旨を説明、協力を依頼し、同意書への署名の得られた学生72名である。在宅看護学必修科目のうち、2年次後期の在宅看護方法論Ⅱにおいて講義・演習、3年次の在宅看護実習についてそれぞれの方法で評価を行い、その評価点をデータとした。

3. 方法

期間は平成18年4月～平成20年3月。在宅看護方法論Ⅱにおいてポートフォリオ学習を行い、作成した凝縮ポートフォリオについて複数の教員による評価を実施した。そして、従来の評価方法によるものとの関連を分析した。評価

方法は1)～4)のとおりである。

1) 凝縮ポートフォリオ評価

凝縮ポートフォリオ評価点は複数の教員が5つの評価の基準（各10点、50点満点；表1）により行う評価点の合計点である。方法は、ポートフォリオ活用推進メンバーと初めて評価を実施した教員の4名（C、D評価者は在宅看護実習担当教員）が、一同に並べた凝縮ポートフォリオを同時に、かつ別々に評価を行った。

2) 元ポートフォリオ評価点

在宅看護学の教員2名が凝縮ポートフォリオとは異なる5つの評価の視点（各2点、10点満点；表4）により評価を行った平均点である。

3) 在宅看護実習評価点

在宅看護実習担当の教員2名により実習の総合評価を行った。課題学習・自己学習の取り組み状況と実習内容、カンファレンス等への主体的参加状況、実習の凝縮ポートフォリオ及び成長報告書により評価を行った。実習終了後に学生が作成した凝縮ポートフォリオと成長報告書による評価を5割、主体的な参加状況などの実習点と合わせて100点満点とした。

4) 在宅看護方法論Ⅰの筆記試験（100点満点）

在宅看護方法論Ⅱと同時期（後期）に展開する訪問看護やケアマネジメントに関連した内容の知識や理解内容を記述式で問い採点したものの。

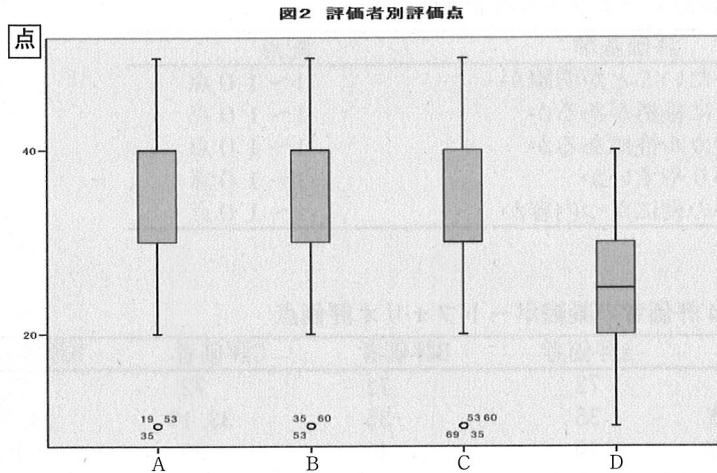


表3 4名の評価者と元ポートフォリオ総合評価点（元ポ総評）の相関関係

	A評価者	B評価者	C評価者	D評価者	元ポ総評
A評価者	1	0.64 **	0.63 **	0.68 **	0.32 **
B評価者		1	0.61 **	0.66 **	0.41 **
C評価者			1	0.66 **	0.41 **
D評価者				1	0.29 *
元ポ総評					1

** p < 0.01, * p < 0.05

4. 分析方法

データの集計と分析は、統計ソフトSPSS14.0Jを用いて行い、性別による評価点の比較では平均値の差についてt検定を実施した。1) の評価者別評価得点の関連ではPearsonの相関係数を算出し、有意差を検証した。1) ~ 4) の評価方法の違いによる評価点の相互の関連も同様に有意差検定を行った。

5. 倫理的配慮

研究者である在宅看護担当教員が当該学生に文書と口頭により本研究の趣旨を説明した。各科目すべて評価の結果（成績）は本人に返された後であり、研究と科目の成績とは一切関連しないこと、協力への合意は自由意志によるもので強制ではないこと、同意には同意書への署名を求めることを説明した。また、授業開始前に評価指針についてはシラバスに凝縮ポートフォリオ評価に関する成績評価の基準を示し、授業中にも学生に対してその作成方法や評価の視点等を適宜説明し指導した。

なお、一部の複数教員による評価の研究については本学の研究倫理審査委員会の承認を得

た。

IV. 結 果

1. 複数の教員による凝縮ポートフォリオの評価点と元ポートフォリオの評価点との関連

凝縮ポートフォリオの評価に今回初めて参加したD評価者を含め、4名の複数教員の評価点の平均値（標準偏差）は24.58~35.0（7.86~11.87）点であり、中央値にばらつきはある（表2，図2）ものの、4名の評価者の相互の点数には“やや強い相関”関係が認められた（表3）。

2. 評価方法の違いによる関連

各評価点について凝縮ポートフォリオの評価点は5-50点の範囲で平均は31.94（±8.86）点、元ポートフォリオの評価は1-10点の範囲で平均は7.64（±2.73）点であった。筆記試験の結果は0-100点の範囲で平均74.08（±10.89）点、実習評価は0-100点の範囲で75.28（±10.07）点であった（表4）。また、元ポートフォリオと凝縮ポートフォリオ評価点には“弱い相関”があり、それぞれ有意な相関が見られた（表5）。さらに、凝縮ポートフォリオと元ポートフォリ

表4 評価方法別評価点の配点

(n=72)

	最小	最大	平均値 (SD)
凝縮ポ評価点	5	50	31.94 (8.86)
元ポ評価点	1	10	7.64 (2.73)
実習評価得点	0	100	75.28 (10.07)
筆記試験得点	0	100	74.08 (10.89)

表5 各評価方法の相関関係

	凝縮ポ評価点	元ポ評価点	筆記試験得点	在宅看護実習評価点
凝縮ポ評価点	1	0.42 **	0.29 *	0.55 **
元ポ評価点		1	0.13	0.30 *
筆記試験得点			1	0.16
在宅看護実習評価点				1

** p < 0.01, * p < 0.05

表6 性別による評価点の違い

	性別	N	平均値 (FD)	P値
凝縮ポートフォリオ評価点	F	66	33.64 (7.0)	**
	M	6	13.33 (5.8)	
元ポートフォリオ評価点	F	66	7.88 (2.5)	
	M	6	5.00 (4.1)	
筆記試験得点	F	66	74.92 (10.4)	
	M	6	64.83 (13.0)	
実習評価得点	F	66	76.21 (9.9)	**
	M	6	65.00 (5.5)	

** p < 0.01

オ実習評価には有意な相関があり、凝縮ポートフォリオの評価点と筆記試験の結果には“弱い相関”が認められた。

3. 対象の概要

協力に同意した学生72名中女性は66名、男性は6名(8.3%)で母数の違いは大きい、平均値の差を比較すると凝縮ポートフォリオ評価点と実習評価点は男性の平均値に比べ女性の方が有意に高かった(表6)。

V. 考 察

評価は実施する教育やサービスの質に対する責任を保証する手段とされ、看護教育においても評価をすることは学習状況や目標達成度、実践における行動、能力、教育プログラムの質に関する判断に向けて情報を獲得する過程(マリリンH, 2001)とされている。鈴木は、評価とは学習や経験で身に付いた能力やスキル、考え方の変化、表現力がどこまでできるようになったか客観的にその距離を知ることができるもの(鈴木, 2002)と述べ、学生の成長のために評

価の考え方を変えることを推奨している。評価の考え方は多様だが、在宅看護学においてポートフォリオ学習方法を実施する意義は、学生が卒業後も自己学習・自己評価を継続する上で有効と考えたからである。

まず、凝縮ポートフォリオの評価と元ポートフォリオの評価の関連において有意な相関がある結果について述べる。これは毎回の学習を意識して元ポートフォリオを作成した学生は、優れた凝縮ポートフォリオを作成したことを示している。凝縮ポートフォリオが元ポートフォリオを集約したミニ版と考えると相関することは当然の結果ともいえるが、凝縮ポートフォリオは単なる学習の「まとめ」ではない。毎回の学習プロセスを集約すれば、良い凝縮ポートフォリオができるというわけではない。

鈴木は、凝縮ポートフォリオの作成は学習プロセスを一通り終え全体を俯瞰して一つひとつの情報の持つ価値や意味を理解した上で再構築する「知的な活動」である(鈴木, 2002)と述べている。良い凝縮ポートフォリオを作成するには、部分である元ポートフォリオの毎回の授

業からテーマの全体を把握する力、重要な情報を見極め選択する力、他者に効果的に伝える表現力などが発揮されていることが条件になる。

在宅看護の元ポートフォリオには表1に示した学習プロセスが見える多種多様なものが収められている。授業の資料の他に、新聞の切抜きや身近な在宅療養者へのインタビュー内容、グループワークや演習により得られた気づき・学びが元ポートフォリオに蓄積され、在宅看護の学習内容の見える学生の元ポートフォリオ評価は高い。逆を言えば学びのエビデンスとなる学習プロセスが見えないと凝縮ポートフォリオの評価は低いのである。在宅看護学は生活の中の看護を学ぶ領域であり、生活の理解のために地域全体をとらえる力と、療養者や家族のニーズに合わせて支援するための、正解のない柔軟な考え方が求められる。在宅看護への学生の興味や関心は元ポートフォリオへの取り組みと関係し、在宅看護の特性とポートフォリオ学習方法と評価が相関する理由の一つと推察される。

また、複数の教員4名による凝縮ポートフォリオの評価が有意な相関を認めたことは、評価の指標が個人の主観で変化するものではなく、客観性や公平性を有する判断のできる指標といえる。なお、評価者には在宅看護に携わっていない教員を含むが、元ポートフォリオと合わせて評価しなくても、凝縮ポートフォリオの評価の指標から学生の意欲・理解度・表現力が判断できる。

筆記試験では、知識や判断力など与えられた課題や目標点に到達したことの評価であり、試験前日に猛勉強すればある程度の高得点が得られる可能性がある。筆記試験の結果が良い学生と凝縮ポートフォリオの評価の良い学生は、ある程度は相関するが、元ポートフォリオや実習評価ほど強い相関ではない。元ポートフォリオからは数値化しにくい学生の学習意欲や達成感がわかる。在宅看護では、学生に地域に関わる看護師として即必要な知識・能力を習得することを期待するより、卒業して数年後の将来、在宅看護に関連する自己学習力を発揮する方法として必要と考えている。凝縮ポートフォリオと元ポートフォリオ、筆記試験結果、実習評価との関連をみると、筆記試験結果よりも実習評価

との相関関係が強い。このことは、凝縮ポートフォリオ評価が数値では計りにくい実習評価と同様の総合的な評価が行われた結果と考えられた。

凝縮ポートフォリオ評価点の男女の有意差ありと出たが、母数の違いが大きく男女差ありというには限界がある。実際には男子学生のポートフォリオ学習に取り組む意欲は伝わりにくく、学習履歴を整理することの得手不得手に性差があるかどうかはわからないが、男子学生にはポートフォリオ学習においては理解度や意欲を確認しながら指導することが必要と考える。

VI. 結 語

凝縮ポートフォリオを複数の教員が共通する評価の視点により評価した結果、相関関係にあり、在宅看護の凝縮ポートフォリオは学習の成果を判断する客観的な評価になりうる事が明らかとなった。凝縮ポートフォリオと在宅看護実習の評価の相関は筆記試験の結果よりも高かった。

謝 辞

本研究を行うにあたり協力いただいた学生の皆様に感謝致します。

また、本学におけるポートフォリオ活用推進の取組みは、島根県立大学短期大学部出雲キャンパスの平成19年度及び20年度の特別研究費により行ったものである。

引 用 文 献

- 浅田豊 (2000) : 「新しい学力観」に立つ日本の学校教育におけるポートフォリオ学習の可能性と意義, *Quality Nursing*, 6 (3), 238-240.
- 小田勝己 (2000) : 総合的な学習に適したポートフォリオ学習と評価, 学事出版, 9.
- 佐藤真編著 (2001) : 基礎からわかるポートフォリオのつくり方・すすめ方, 1, 東洋館出版社, 東京.
- 鈴木敏恵 (2002) : ポートフォリオで評価革命!

- －その作り方・最新事例・授業案－，学事出版，22-31.
- 鈴木敏恵（2004）：ポートフォリオが変える！看護と医療 もっと成長したいと願うあなたへ（1），看護展望，29（8），858-859.
- 鈴木敏恵（2007）：ポートフォリオが看護教育を変える！与えられた学びから意志ある学びへ，看護教育，48（1），10-17.
- 鈴木敏（2002）：こうだったのか！ポートフォリオ－思考スキルと評価手法－，Gakken，7-8.
- 高浦勝義（2001）：ポートフォリオ評価法入門，明治図書，36-37.
- 灘久代（2006）：「ポートフォリオ」の活用とその考え方を導入した評価の一方法，看護教育，47（5），440-444.
- マリリンH. オーマン、キャスリーンB. ゲイバーソン、舟島なをみ監訳（2001）：看護学教育における講義・演習・実習の評価、医学書院、1-5.
- 安川仁子（2007）：看護教育におけるポートフォリオの活用－学習プロセスを重視した評価，看護教育，48（1），18-23.
- 山田雅子（2008）：看護教育の新カリキュラムにおける在宅看護論の位置づけと今後の方向性について，訪問看護と介護，13（1），12-16.

吾郷ゆかり・吾郷美奈恵・山下 一也・加藤 真紀・祝原あゆみ

Portforio Assessment at a Home Care Nursing

Yukari AGO, Minae AGO, Kazuya YAMASHITA

Maki KATO and Ayumi IWAIBARA

Key Words and Phrases : home care nursing, condensed portforio, portforio assessment